

マザー・グースについての一考察

A Study of Mother Goose

中 村 千 晶*

Abstract

In general the name “Mother Goose” is popular in Japan, but it is difficult to understand it in detail. Because it is a big theme and includes many poems, songs and stories. In England people say a Nursery Rhymes and don't say Mother Goose.

In France Maurice Ravel composed the song “Ma Mère l'oye” for the piano. This means Mother Goose in French and this piece has a long history. They may have common elements.

This report focuses on the relationship between “Mother Goose” and “Ma Mère l'oye” and the influence they have had on one another.

キーワード：マザー・グース、ラヴェル、マ・メール・ロワ

序章

「マザー・グース (Mother Goose)」については、われわれは「ナーサリー・ライム (Nursery Rhymes)」(伝承童謡)、英語の詩、昔話、ナンセンス、また美しい挿絵の絵本、メロディを伴う子どもの歌など、漠然としたイメージを持つが、具体的には「メリーさんのひつじ (Mary Had a Little Lamb)」や「きらきらぼし (Twinkle Twinkle, Little Star)」, 「ボートあそび (Row, Row, Row your Boat)」, 「ロンドン橋 (London Bridge Is Falling Down)」, 「谷に住んでいるお百姓さん (The Farmer in the Dell)」, 「マルベリー・ブッシュ (Here We Go Round the Mulberry Bush)」など、結構知っている歌があることに気付く。それは日本でも子ども時代に、親も子も一緒に楽しく歌って遊んだ経験を持っているからである。これらすべては、後述するイギリスの「ナーサリー・ライム」の中に見ることができる。

前述の「マルベリー・ブッシュ」について特筆したいことは、本学の前身校であるランバス女学院保育専修部で大正9年から昭和16年(1920-1941)まで教鞭をとっていた高森ふじ(1877-1969)が、アメリカのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに留学中、子どもの歌を収集し持ち帰ったものの一つとされ、当時は現在のように歌が豊富に出版され

ることはなく、教材に困っていた学生や保育者のために日本語に訳して、だれにでも伝達した記録がある。

日本語訳は次のようになっている。“庭に出てあそぼう、庭に出てあそぼう、庭に出てあそぼう、冬の日、太郎さん、花子さんあそびましょう、太郎さん花子さんあそびましょう、手を取りてあそびましょう、手を取りてあそびましょう”とあり、身体の動きを伴っていたことは言うまでもない。この歌も後になり、実は「マザー・グース」の歌であることが解った。

本論文の目的の中に、「マザー・グース」の詩や話を通して作曲された歌や曲についての考察も含めた。

その一つとして、フランスのモーリス・ラヴェル(Maurice Ravel 1875-1937)作曲のナーサリー・ライムを主題とした5つの組曲「マ・メール・ロワ (“Ma Mère l'oye” Mother Goose Suite for one piano, four hands)」を取り上げた。原曲は one piano, four hands の連弾の曲で、後に two pianos に編曲もされている。

「マ・メール・ロワ」は「マザー・グース」のフランス語であるが、どちらが発祥かということについては諸説あり、英語圏とフランス語圏の文化の交流や結びつきの深さを考えると決めがたいものがある。これは本章の中で触れている。そこで本論文に

* Chiaki NAKAMURA 教育学部准教授

においては主として「マザー・グース」の概要を調べ、ラヴェルが作曲した楽曲「マ・メール・ロワ（マザー・グース）」について考察を深めたい。

第1章 マザー・グースの概要

第1節 詩と物語

近年イギリスを初めとして各国で「マザー・グース」に関する研究が盛んに行われているが、そのもととなっている唄はほとんど口伝で伝承されてきたため、出典が明確でないものが多い。鷺津名都江（Natue Washizu 1948- 後述）は、イギリス留学中「マザー・グース」の名を言っても通用せず、「ナーサリー・ライム」と言い換えれば「マザー・グース」と解されることができたと述べている。現地で実際に使われている言葉を知ることは研究上の不可欠である。

「ナーサリー・ライム」のナーサリーは、イギリスでは託児所 Day Nursery、保育所 Nursery School、幼児の歌 Nursery Song などに用いられる。また、ライム（Rhyme）には韻、押韻の意味がある。したがって、一般に「ナーサリー・ライム」は子ども部屋の押韻詩、あるいは幼児の押韻詩と解され、もし「マザー・グース」の言葉が使われた場合は、当時出版された『マザー・グースのためのメロディー、ゆりかごのためのソネット（Mother Goose's Melody, or Sonnets for the Cradle）』（1765）から引用されていた。

日本で「マザー・グース」が取り上げられるのは、北原白秋がイギリスの伝承童謡として日本に紹介して以来のことである。童謡という言葉から詩にメロディがついたもの、子どもの歌う歌であると考えられた。

「マザー・グース」は基本的に、詩、唄（歌）、お話の3つが一体となっている。先ず英詩についてであるが、イギリスの子どもたちは現在でも幼児のための押韻詩、「ナーサリー・ライム」に家庭、保育所や幼稚園で自然に触れる機会を持っている。詩は子どもの耳から入り、英詩の持つ韻のリズムや強弱を自然に感じ、楽しんでいる。聞いた詩は子どもに残り、記憶される。親や保育者が子どもに読んで聞かせるための詩、唄（Reading Rhyme）であると言える。口承のため、語り継がれているうちに自然にメロディが付き、人によって、抑揚、リズムなどが異なるという変化も見られる。

詩の長さは4行程度の短いものから、12番を超える長いものまで様々である。また、英詩は語られ聞くだけでなく、目からの楽しみも絵本の使用によって加わった。文字が読めなくても、子どもは絵本を見て楽しむことができる。大人が加わると、子どもに絵本を見せながら詩の読み聞かせを行うことができる。そして、耳から聞くことと、絵本の絵を見る視覚的なことの両方を通して英詩に親しむ意義は大きい。

第2節 唄と歌

英語圏のものを邦訳することには難しさがあるが、「マザー・グース」では「唄」の文字が使用され、「マザー・グースの唄」などと表記される場合が多い。広辞苑によると、広く一般には「歌」の文字を用い、声に節をつけて歌う詞とある。三味線を伴奏とする邦楽などの場合には「唄」を使うとある。本論文では、詩にメロディを伴っているものとして「歌」の表記を用いた。

歌は、遊び歌、遊ばせ歌、数え歌、子守歌、唱え歌、物語歌、はやし言葉、早口言葉などに分類されているが、作曲者の有無と同じ詩であっても、複数のメロディで歌われているなど多様である。楽譜があればすぐ解ることが、口承のためメロディを発見するのはなかなか困難であった。よく知られている「ロンドン橋」の詩とメロディはアメリカで発生し、イギリスに逆輸入との説も有り、各国にも伝播した例である。

鷺津名都江がイギリスで調査をしたときに、イギリスの作曲家 J. W. エリオット作曲の『イギリスのナーサリー・ライムと幼児の歌（National Nursery Rhymes and Nursery Songs）』（1870）の楽譜を発見した。現在、イギリス人の生活にとけ込んで、特に幼い子ども達の好きな「ジャックとジル」、「6 ペンスの歌をうたおう」は、実はイギリスの作曲家のものであったことがこの本から解った。

エリオットは、20年後に『マザー・グースまたはイギリスのナーサリー・ライムと幼児の歌（Mother Goose; or, National Nursery Rhymes and Nursery Songs）』（1890）をイギリスとアメリカの両国で出版している。自然的発生で伝承されたメロディや、後年、作曲家が詩にメロディをつけたもの、イギリスで、アメリカで、各国で作られたものなど、多様な発生がこれによって解る。様々な要素を持った「ナーサリー・ライム」が世界交流を持った。

第2章 マザー・グースの「お話」の系譜

第1節 イギリスにおける集大成

子どものための「お話」は、主として伝承童話のために出典が明確でなく諸説が混在する。英文学者で「マザー・グース」研究の平野敬一（1924-2007）は、イギリスにおける童謡の集成を以下の3つの業績に大きく分けた。

- (1) ニューベリー編（18世紀後半）
- (2) ハリウエル編（19世紀半ば）
- (3) オーピー夫妻編（20世紀半ば）

ニューベリー編（John Newberry 1713-1767）は、ロンドンの出版業者ニューベリーによるもので、「ナーサリー・ライム」より52篇を集め『マザー・グースのメロディー、あるいはゆりかごのためのソネット（Mother Goose's Melody, or Sonnets for the Cradle）』（1765）として出版した。52篇中、29篇はすでに1744年頃に出版されていた『トミー・サムの可愛い唄の本』から引用している。英語学者の渡辺茂は、子どもを面白がらせ眠らせるために、当時の子守をする人達が最も良く知っていた唄や子守唄を選曲したとの考えを示している。ソネットはイタリア語の14行詩の歌の意も重ね持ち、子どもを寝かせつけるときなどに適していたと思われる。

本の体裁は木版の挿絵の下に唄が書かれ、さらに文人ゴールドスミス（ニューベリーの友人）のコメントが付け加えられた。ナンセンスな唄、とぼけた唄、真面目な感じのものなど面白く注釈され、教訓的なものも多々あった。

このようにニューベリー編は題名に「マザー・グース」の名が用いられていた最初のもので、以来伝承童謡の代名詞として「マザー・グース」の名が定着することになる。

ハリウエル編はシェイクスピア学者として著名な James Orchard Halliwell（1820-1889）が22歳のときに『イングランドの童謡（The Nursery Rhymes of England）』（1842）として発表したもので、600篇もの唄と注釈が収められている。ニューベリー編に比して唄の数はすこぶる多い。ハリウエルによる綿密な調査と研究の成果と見なされている。さらに7年後には『イングランドの俗謡と童話（Popular Rhymes & Nursery Tales of England）』（1849）を加

え、版を重ねた。第5版の序文には、古代スカンジナビアの幼児文学の民間遺産の価値を訴え、伝承の唄の中に幼いものにだけ解るような意味とロマンがあり、豊かに想像力に働きかける作用があること、したがって新作の童謡と置き換える事の出来ないものであると、現に当時の堅苦しい学校教育に批判の目を向けている。

ハリウエルは収集した唄を次の18項目に分類し¹⁾、解説を加えた。このようなハリウエルの研究は後世に高く評価されている。

- 第1類 歴史的 王様などの人物
- 第2類 文字遊び（Literal）アルファベット、数字 子どもの学習用
- 第3類 物語（Narrative rhymes）話の筋のある物語形式のもの 34篇
- 第4類 格言 俗言も含む「お天気雨」他
- 第5類 学校関係 学校生活や勉強
- 第6類 歌謡「ロンドン橋」「6ペンスの唄」他
- 第7類 なぞなぞ「ハンプティ・ダンプティ」50篇
- 第8類 おまじない（Charms）いろいろな用途
- 第9類 おじいさんとおばあさん「一切空ばあさん」25篇
- 第10類 遊戯（Games and amusements）母親が幼児をあやすときに
- 第11類 パラドックス 矛盾、背理
- 第12類 子守唄（Lullabies）
- 第13類 擬声音 戯れ唄 Rub-a-dub-dub などのように
- 第14類 愛と結婚 恋人、夫婦、男女
- 第15類 動物たち てんとう虫、でんでん虫、猫、鶯鳥、羊、牛、馬他 100篇
- 第16類 積み上げ話（Accumulative rhymes）「ジャックの創った家」他
- 第17類 地方的 地名
- 第18類 遺物 分類困難なもの 50篇

オーピー夫妻編はハリウエルから100年が過ぎ、夫 Peter Opie（没）と妻 Iona Opie（1940-）は『オックスフォード版・伝承童謡事典（The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes）』（1951）、『オックスフォード版・伝承童謡集（The Oxford Nursery Rhyme Book）』（1955）、『学童の伝承とことば』（1959）を出版し、ハリウエルの後を引き継いで非

1) 平野敬一 1972 マザー・グースの唄 中央公論社 48-63

常に大きな業績を残した。夫妻はハリウェルの後、諸説についての検証や研究がなされていないので、それが自分達の課題であると考え、文献初出例などを具体的に詳細に提示して、資料収集に全力を注いだ。

前述の鷺津名都江は、イギリス留学当時、オービー夫人に会う機会に恵まれた。その時「ナーサリー・ライム」が第2次世界大戦までは主として中・上流階級のものであったが、戦後になって漸く一般庶民の間で広まっていったと言う情報を得ている。それは18世紀から20世紀にかけて、研究者達によってまとめられたものが出版され、一般に広められた功績によるものが大きいことは明らかである。

「マザー・グース」の名の通り、一般によく知られている鷺鳥の登場する唄を記してこの項の締めくくりにしたい。

Gander

Goosey, goosey gander,

Whither shall I wander?

Upstairs and downstairs

And in my lady's chamber.

There I met an old man

Who would not say his prayers,

I took him by the left leg

And threw him down the stairs

第2節 アメリカ

英語圏のアメリカでも最初に「マザー・グース」がどのように伝わってきたか明確でない点が多い。一つ人名に基づいた俗説があったが、あくまで俗説であって後日それは否定されている。

1665年ボストンで生まれのエリザベス・グース夫人が作ったのではないかとの説である。グース夫人の「グース」と「マザー・グース」が一致しているところからアメリカ人の中で長く信じられていたと言う。渡辺茂（前出）はグースと言う人が実在し、娘が印刷屋に嫁いだことまでは事実であるが、グース夫人を「マザー・グース」に仕立て、匿名でボストンの新聞に発表した人の存在ははっきりしていないとの見解を述べている。しかし、北原白秋すら訳した自著『まごあ・ぐうす』の序にこの事を書いているところを見ると、世界の研究者の多くがこの説を信じていた節がある。

「マザー・グース」のアメリカでの出版の記録は1883年のボストンでの『マザー・グースのメロ

ディー、またはゆりかごのためのソネット (The True Mother Goose)』が最初であり、これはイギリスのニューベリー編のアメリカ版であり、これによってアメリカでは一躍広まったと見られる。さらにこの復刻版が1970年に出版された。

“Mother Goose's Melodies” New York: Dover Publications として160篇が収められている。いずれにしろアメリカではイギリス版が基本とされていたのは明確で、建国の史実を考えても「ナーサリー・ライム」の交流も蜜であったことに違いないと推測されるのは容易である。しかし、現在アメリカでは「ナーサリー・ライム」より「マザー・グース」のほうがポピュラーな呼び名となっている。

第3節 フランス

“Mother Goose” は一般的にイギリスやアメリカの英語圏の国のものと思われがちであるが、むしろ「マザー・グース」の名称はフランスが発祥ではないかと思われる事実がある。それに最も関わっているのがペローであり、日本でも子どもたちが読む「赤ずきんちゃん」、「長靴をはいた猫」、その他、多くの童話が紹介され、今日まで親しまれている周知の作家である。

ペロー (Charles Perrault 1628-1703) が、1695年に手書きによる『がちょうおばさんの話』をルイ14世の姪にあたる内親王に捧げたことに始まる。この中には「眠れる森の美女」、「赤ずきんちゃん」、「青ひげ」、「長靴をはいた猫」、「仙女」の5篇が収められていたが、このことが発見されたのは1953年で、日はまだ浅い。

続いて1697年に散文8篇による童話集『過ぎし日の昔の物語ならびに教訓—がちょうおばさんの話— (Histoires ou contes du temps passé. Avec de moralites -Contes de ma mere l'oye-)』を出版している。このタイトルを『寓意のある昔話、またはコント集』と訳されるが、副題は「がちょうおばさんのお話」となっている。“Mother Goose's Tales”、すなわち「マザー・グース」である。ペローの本の口絵には、ろうそくを立てた暖炉の前で、農夫の身なりの老婆が糸を紡ぎながら裕福な服装の3人の子どもに昔話をしている様子が描かれている。そしてその老婆の後ろのドアに、はっきりと“CONTES DE MA MERE LOYE” (がちょうおばさんのお話) と書かれている。当時、上流階級の家では乳母や召使いがいて子どもの世話をしていたので、お守りをし

ながら子どもたちに口伝えて昔話を伝えていた。鶯鳥は当時のヨーロッパでは、郊外や田園地帯で常時見られる人々の生活に密着していた鳥であった。現在でも郊外に出ると、放し飼いで農家の周囲を歩いている鶯鳥を見ることが出来る。「がちょうおばさんお話」としたのは、年老いた乳母や召使いの姿ががちょうに似ていること、また鶯鳥の小さなくちばしから次々とたくさんのお話が出て来る様子を想像したものでなかったろうか。1729年にはロバート・サンバー (Robert Samber 1682-1745) によって最初の英訳がなされ、副題が「マザー・グースの物語り」となっていた。それによって「マザー・グース」の名称は、むしろフランスから発生したと思われるのが妥当である。

ペローは上流階級のご家庭に生まれ、父は法務官僚で教育に熱心な人物であった。夫人に先立たれ3男1女を育てることになり、自身の子どもの教育や当時のフランスの教育に関心を持つようになった。子どもの教育に関わる中から、口承文芸、童話、および文学作品が生み出されていった。『ペロー童話集』(1695, 1697)の序文に、物語には教訓も含まれているので、幼い年齢にふさわしい楽しい話の中に包み込んで与えると良いと言い、「お話」に教育的な配慮をしている点が特徴である。

子どもの「お話」は、紀元前の「イソップ童話」、16世紀後半フランスの「ラ・フォンテーヌの寓話集」などがあり、ペローの後にはドイツの「グリム童話」、デンマークの「アンデルセン童話」などが続いている。その中でも、ペローの童話は文学の世界において評価されている。

第4節 日本

「マザー・グース」は北原白秋 (1885-1942) の訳により広まったことはよく知られているが、どのような道筋で日本に入ってきたのだろうか。それ以前の導入については、鎖国が解かれた幕末から明治初期の英語教育の教科書『ウィルソン・リーダー』に掲載されたことに始まる。このリーダーは福澤諭吉がアメリカから持ち帰ったもので、後に慶応義塾の教科書となった。明治初期の教科書に『キラキラ星』が掲載され、いろいろな人によって訳され広がっていった。また、アメリカ人やイギリス人の宣教師が来日し、当時の英語教育に関わったことも大きく影響している。

アメリカン・ボードの宣教師として来日し、神戸

に着いたハウ (Annie. L. Howe 1852-1943) は神戸の頌栄幼稚園および頌栄保姆伝習所 (現、頌栄短期大学) を創設し、キリスト教の伝道と幼児教育に尽力した。明治25年 (1892) 『幼稚園唱歌』を出版した。

この唱歌集に「マザー・グース」より、「キラキラ星 (前述済み)」、「我小さい猫を愛す (I Like Little Pussy)」、「雪ふりつめば (When the Snow is on the Ground)」、「北風 (The north wind doth blow)」の4曲を日本語に訳して収めた。明治時代の英語教育、および幼児教育の中にすでに「マザー・グース」が取り入れられていたことは、非常に興味深いことである。

竹久夢二 (1844-1934) は明治43年 (1910) 画文集『さよなら』に2篇を、大正8年 (1919) の創作童謡集『歌時計』にも邦訳している。

土岐善麻呂 (1885-1980) は大正8年 (1919) にローマ字詩集『Otogiuta』を出版し、その中に5篇を訳した。

北原白秋 (本学校歌「空の翼」の作詞者) は「ゆりかごのうた」、「からたちの花」、「砂山」、「ペチカ」、「あわて床屋」、「待ちぼうけ」などの現在も愛唱歌が多い。「マザー・グース」に関しては、大正9年 (1920) に鈴木三重吉が創刊した『赤い鳥』において、「胡桃 (There was a little green house~)」と「柱時計 (Hickory dickory dock~)」の2篇を訳して掲載している。大正10年 (1921) に英国童謡集『まごあ・ぐうす』を出版した。131篇を訳して収めた。大正9年版と大正10年版を比べると訳も異なり、押韻や英語が持つリズムに留意し、詩人として推敲を重ねた結果であったと思われる。

また白秋と新詩会を結成した詩人、竹友藻風 (1891-1954 本学で教鞭を取っていた) は、昭和4年 (1932) に87篇を訳し、研究社英文訳註叢書から出した。

現在では势力的に活動をしている詩人の谷川俊太郎 (1931-) も「マザー・グース」の邦訳を行っており、昭和45年 (1970) に絵本『スカーリーおじさんのマザー・グース』を出版し、50篇を訳した。その訳には現代なセンスが溢れ、昭和50年 (1975) 『マザー・グースのうた』で日本翻訳文化賞を受賞した。

「マザー・グース」は明治時代より現在までたくさんの作家が翻訳し、出版されている。しかし詩の

内容だけでなく、英詩の「マザー・グース」が持つリズムや韻を日本語に置き換えることの難しさもあり、時代に合った新しい良い邦訳が出て来ることが期待されている。

第3章 ラヴェル

第1節 ラヴェルについての略記

ラヴェルはフランスの南西部の土木技師の家庭で育った。音楽愛好家の父の理解のもとパリ音楽院でフォーレにピアノと作曲を学び、シャブリエやサティの影響を受けてたちまち頭角を現し、ドビュッシーと共にフランス印象派の代表的作曲家となる。

ラヴェルの生きた19世紀後半から20世紀にかけては後期ロマン派を終え、近代音楽へ移り変わる変革の気運と、新しい音楽への期待が高まった時代であり、フランス革命100周年を記念したエッフェル塔の建設や、万国博覧会の開催など活気にあふれていた。

ラヴェルは初めて見る万国博覧会での東洋の異国の魅力に捕らえられ作曲の契機となった。「マ・メール・ロア」もその影響を受けた作品の1つと言える。

時代を背景にサティ、ミヨー、オネゲル、オリック、プーランク、デュレ、タイユフェール、加えてロシアのプロコフィエフ、ストラヴィンスキーなどの音楽家とも交流を持ち、新しい音楽を求めて活躍した。

一方の旗頭であったドビュッシーはフランス音楽の新しい様式や音楽界のリーダー格として華々しい活躍をしていたが、ラヴェルは異なった音楽観を持ちはじめていた。自分に内在する音楽を結晶化するまでも突き詰めようとした。両親を亡くした精神的な不安定さも影響したと言われる。完璧なものへの関心を強め、より内省的なものとなっていく。

ヨーロッパの伝統的な音楽を継承しながらもラヴェル自身の音楽観に基づいた和声・旋律・リズム・形式・音楽構造など、独特の作風を残した。

バレエ・オペラ・管弦楽・室内楽・ピアノ・声楽・編曲など幅広い分野に作品を残している。いずれもラヴェル独特の優雅な旋律、洗練された和声など、今なお多くの人々に感銘を与えつづける巨匠である。

第2節 「マ・メール・ロワ (Ma Mère l'oye)」

1910年「マ・メール・ロワ」は4手のピアノ連弾

用としてパリで出版された。副題に「子どものための5つの童話 (Cinq pièces enfantines)」とある。

題材となった5つの寓話はペローのもの3話、フランスの女流作家ドーノアとボーモン童話をそれぞれ1話ずつ用いている。

題名となった「がちょうおばさんのお話」はペローの『過ぎし日の昔の物語ならびに教訓—がちょうおばさんのお話—』から取って名付けたもので、ペローの作品を主要な題材としたことによると思われる。

初演は1910年の「独立音楽協会オープニングコンサート」で若手女性演奏家のジャンヌ・ルルーとジュヌヴィエーヴ・デュロニによってなされた。このコンサートにはラヴェルも出演し、ドビュッシーの「スケッチ帳」を弾いたと記録されている。

「マ・メール・ロワ」作曲の動機は、ラヴェルが無類の子ども好きであったこと、自分には子どもがなかったが、知人の子どもを非常に可愛がっていたことなどから、子どものころ聞いた詩の思い出を呼び起こしたかったのではないかと想像できる。

曲の様式や書法は簡潔で洗練されている。しかも繊細なシンプルさが感じられる。それらが人々の印象に強く残り親しまれ再演の多い曲となっている所以ではなかろうか。

メシアン (Messiaen Olivier 1908-1992) の分析を参考にしながらこの5曲について次項で考えたい。

1) 「眠りの森の美女のパヴァーヌ」 (Pavane de la Belle au bois dormant)

Lent ゆるやかに イ短調 4/4拍子

ペロー童話「眠りの森の美女」

年老いた妖精がお姫様は紡錘で手を怪我して命を落とすと予言し、100年の眠りにつくことからお話が始まる。静かに始まる5音音階 (ペントニック) のメロディが印象的である。当時のフランスでは5音音階のことを中国の旋法と呼んでおり、ヨーロッパにない音の響き、東洋的な音を求めていた。パヴァーヌとは16世紀のヨーロッパに普及した舞踏の一つで、1組の男女による行進の意味を持つ舞踏である。最初は王侯貴族の踊りで、ペローと時を同じくしたルイ14世も宮廷でパヴァーヌを用いていた。お姫様に捧げる叙情的で典雅な曲となっている。

2) 「おやゆび小僧」 (Petit Poucet)

Très modéré きわめて中庸に ハ短調 2/4、3/4、4/4、4/5拍子

ペロー童話「おやゆび小僧」

同じくペロー童話からである。ラヴェルの楽譜には、タイトルの次に「おやゆび小僧」の引用文が少し掲載されている。お話は、貧しい木こりの夫婦が7人の子どもに食べ物を与えることができず、森に置き去りにする。一番末のおやゆび小僧はパンくずを道に撒き、それを頼りに道を見つけようと思っていたが、鳥たちがパンくずを食べてしまったので途方に暮れる。2つの8分音符が連なる単調な感じが、道に迷ってさまようおやゆび小僧を現している。メロディは2度から徐々に広がり、第3楽節では中国旋法の音で独特な雰囲気醸し出す。そしてパンくずを食べてしまった小鳥たちのさえずりやカッコーの鳴き声が加わり、また単調になる。もの悲しさを含みつつ、最後はハ長調の和音によって少し明るく終わる。

3) 「パゴダの女王レドロネット」(Laideronnette, Impératrice des Pagodes)

Mouv de Marche 行進曲の速さで 嬰へ長調
2/4拍子

フランス女流作家ドーノアの童話「緑の蛇」

ペローと同時代の作家の童話で、楽譜に引用文の掲載がある。パゴダは英語で仏舎利を安置するための仏塔のことを意味するが、ここでは中国製で陶器の首振り人形を指す。陶器の首振り人形のレドロネット皇妃がお風呂に入ると人形たちが歌を歌い、楽器を弾き始め、彼らは胡桃の殻の堅琴やアーモンドの殻の弦楽器を持っているが、楽器を体の大きさに合わせなければならないという場面がある。曲は3部形式で、中国の旋法が用いられている。第1部は、目を閉じた小さな妖精がかわいらしく動いている様子を黒鍵の音と16分音符で表している。全音音階と長音階との対比がおもしろい。第2部は中国の旋法による新しい主題が提示され、カノンになる。第3部は再現で、最後に和音が4回鳴り、中国の旋法の構成音が同時に鳴って響き、印象的に終わる。

4) 「美女と野獣の対話」(Les entretiens de la Belle et de la Bête)

Mouv de Valse très modéré きわめて中庸な
ワルツのテンポで へ長調 3/4拍子

フランスの女流作家ボーモンの童話「美女と野獣」

子どものために道徳的な教訓を含む話を書いたことで知られている作家ボーモンの代表作、『子ども

の雑誌』からの1篇である。楽譜に引用文の掲載がある。外見は醜いが心の美しい野獣が美女に求婚すると、美女は最初ためらう。しかし、野獣は美女を愛し、彼女もそれを受け入れた。すると呪いが解け、野獣は王子に変身するという話である。曲の構成は、最初に美女の主題、中間部は野獣の主題、次に美女と野獣の主題が一緒に展開する。全音音階が用いられ、響きが豊かになっていく。再現部は野獣と美女の主題が組み合わされ、展開と絶望が表現される。ワルツのテンポにも変化が見られ、フェルマータの休符の後、ピアノシモのグリッサンドでコーダが始まり、これは野獣が王子に変身する表現である。王子の主題は中音域、美女は高音域で示され、主音は最後まで保持される。そして和音の解決によって終結する。ラヴェルの研究家でピアニストでもあるオレンシュタイン (Arbie Orenstein 1975 ニューヨーク市立大学クィーンズカレッジ教授) によると、ここに「ジムノペティ」の作曲者であるサティの影響が見られると言う。

5) 「妖精の園」(Le Jardin féérique)

Lent et grave 遅くおごそかに ハ長調 3/4
拍子

ペロー童話「眠りの森の美女」

お話は最初の「眠りの森の美女」に戻り、100年の眠りについてお姫様が王子の口づけで目を覚ます最後の場面である。1曲目の「眠りの森の美女のパヴァーヌ」に続く、静かで美しい曲である。メシアンはテンポ表示 *Lent et grave* からマタイの福音書、第18章第3節 “心を入れかえて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることは出来ない” を想起すると考えた。最終曲という事もあり、この曲で伝えたいことが示される。形式は4つで、まず1曲目パヴァーヌからの動機が出る。そして中間部の主題はドリア旋法で、嬰ハ短調の和声が付く。再現部ではハ長調、静かで穏やかな感じで進む。最後は鐘の音、グリッサンド、アルペジオが繰り返され、ハ長調の主和音へ到達して完結する。お話の結末を意味する、華麗で輝かしい終わり方である。

オレンシュタインは、このようにラヴェルが子どもの頃の詩を呼び起こそうと望んだことが作曲に影響し、曲の様式や書法の簡素化につながったと考えた。単純な方法でありながら、抒情生を持ち、高貴で神秘的な曲となったことと特徴づけている。

終章

「マザー・グース」という大きなテーマであるだけに、その言葉の裏にはたくさんの事柄が秘められていた。イギリスの伝承童謡、「ナーサリー・ライム」を中心とする歌とお話に長い年月が加わり、奥深いものとなっている。そして、イギリスからフランス、アメリカ、日本など各国に渡り、伝わり方やその内容にも差が見られ、国の違いによる影響も受けながら、時代を経て今日まで続いている。現在も、幼い子どもから大人まで親しまれていることの意義は大きい。

本研究では1つの主要な課題として、ラヴェル作曲の「マ・メール・ロワ」について考察してきたが、筆者は曲の理解のために全曲を弾き、考察の参考とした。さらに2012年5月29日に兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホールに於いて、演奏の発表を予定としている。

フランスで生まれ育ったラヴェルが、自国の童話作家ペローの『過ぎし日の昔の物語ならびに教訓—がちょうおばさんの話—』からの共感により、自分の曲のタイトルに仏語で「マ・メール・ロワ」としたのは自然の成り行きであった。

子どもをこよなく愛したラヴェルは、もし自分に子どもがあればきっと聞かせたいと思ったにちがいない。「マ・メール・ロワ」以外にも子どもに関わりのある曲を数曲作っている。

1905年「おもちゃのクリスマス (Noël des jouets)」、1925年歌劇「子どもと魔法 (L'Enfant et les sortilèges)」など。このオペラはコレット (Colette Sidonie-Gabrielle, 1873-1954) の台本により、これまでの伝統的なオペラでなく、アメリカのオペレッタの精神を取り入れ、オペラとバレエを融合した新しい歌劇を目指した。子どもの合唱、子ども時代の幻想や虚構の世界など、音色も斬新に表現し、独特な感性の作品となっている。

これらの子どもとの関わりを持つ曲、あるいは器楽作品の背後には文学からの刺激があり、ペロー童話だけでなく、「千夜一夜物語」、「沈める鐘」、その他、多く文学作品からも影響を受けている。

前述したメシアンへの聖書の引用は、メシアン自身が作曲家であると同時に神学者でもあり、オーガニストとして終生教会と深いつながりをもっていたことから、信仰上からもラヴェルの子どもにたいする

愛に深く共鳴するものがあったと思われる。メシアンはシューマンの「子どもの情景」、「フモレスケ」などの終曲からおなじような子どもへの思いを想起し、敬虔な信仰の証として結び付けている。聖書の箇所はさらに「自分を低くして、この子供のようにになる人が、天の国でいちばん偉いのだ」と続いている。ラヴェルが「Lent et grave」を聖書を意識して用いたという記事は見当たらないが、「ナーサリー・ライム」が育った時代、社会背景にはキリスト教の強い影響力があったことは否めない。この研究を通して「ナーサリー・ライム」、そして「マ・メール・ロワ」、「マザー・グース」の生まれた背景から、宗教的社会状況を抜きにして考えることは出来ないのではないかとの思いを強くもった。それは即ちその時代の子どもの観の変遷にも目を向けなければならないと言うことである。本論文ではこの事項が欠落していることを反省し、次の研究につなげていきたい。時代、国、人種の違いはあってもこのメシアンの考えは、「マザー・グース」すべてに通じるメッセージとして受け止める事ができるのではないだろうか。

引用文献

- 平野敬一 1972 マザー・グースの唄 中央公論社 48-63
 新村出編 1955 広辞苑 岩波書店
 共同訳聖書実行委員会 1987 聖書 新共同訳 日本聖書協会

参考文献

- ボーモン著 鈴木 豊訳 1971 美女と野獣 角川書店
 平野敬一 1972 マザー・グースの唄 中央公論社
 藤野紀男 1987 マザー・グース案内 大修館書店
 藤野紀男、夏目康子 2004 マザー・グースコレクション ミネルヴァ書房
 加藤恭子、ハーヴェイ・ジョーン 1999 大人になってから読むマザー・グース PHP 出版
 松永晴紀編著 1991 ピアノ・デュオ作品事典 春秋社
 メシアン・オリヴィエ&イヴォンヌ著 丹波明監修 野平一郎訳 2007 メシアンによるラヴェル楽曲分析 全音楽譜出版社
 内藤里永子著 吉田映子訳 1990 イギリス童謡の星座 大日本図書
 夏目康子 2003 不思議の国のマザー・グース 柏書房
 西浦禎子 1992 シャルル・ペロー『過ぎし昔の物語ならびに教訓』の成立と受容—17世紀フランス・サロンの女性たちをめぐる— 成城大学文藝紀要140号 30-66
 オレンシュタイン・アービー著 井上さつき訳 2006

ラヴェル生涯と作品 音楽之友社
ペロー・シャルル著 新倉朗子訳 1982 完訳ペロー童
話集 岩波書店
———— 天沢退二郎訳 2003 ペロー童話
集 岩波書店
———— 荒俣宏訳 2010 ペロー童話集
新書館
柴田南雄、遠山一行総監修 1995 ニューグローブ世界
音楽大事典 講談社
白川真里子、中村麻美、キッズ英語編集部編 2000 う
たおう！マザーグース 株式会社アルク
鷺津名都江 1992 わらべうたとナーサリー・ライム
晩聲社
鷺津名都江 2007 ようこそ「マザーグース」の世界へ
NHK 出版
渡辺 茂編著 1986 マザー・グース事典 北星堂書店

参考楽譜

Maurice Ravel 1910 *Ma Mère l'oye* France: Durand
————, Jacques Charlot transcrittion par 1910 *Ma
Mère l'oye* France: ———
————, edited by Weekly and Arganbright 1985 *Ma
Mère l'oye, Mother Goose Suite*, for one piano, four
hands USA: Neil A Kjos Music Company
三善晃監修 2006 ラヴェル—ピアノ作品全集第2巻—
全音楽譜出版社